春夜宴桃李園序　解答

A　語句の意味と読み

(1) 宿屋・旅館。 ／★「逆」は「迎える」の意味。旅人を迎え入れる所＝宿屋。天地を宿屋にたとえている

(2) かかく／通り過ぎていく旅人。 ／★歴史的仮名遣いの「くわ」は「か」に直す。「光陰（月日）」を旅人にたとえている

(3) はかない人生。（水に浮かんでただようように定まらない、短い一生。）

(4) 理由・わけ。 ／★ふだんは「もつて」と読む「以」を、ここは「ゆゑ」と読む。「良に以有るなり」＝「まことにもっともな理由がある」

(5) 春がすみにけむる（ぼんやりとかすんだ）春の景色。 ／「煙」は火のけむりではなく、かすみ・もやのこと

(6) 天地・大自然（万物を生み出すもと）。 ／大きなかたまり＝大地・天地。その天地を人のように「私に貸してくれる」と書いている

(7) いよいよ・ますます。 ／★「うたた」と読む。「高談転た清し」＝気高い語らいがますます清らかになっていく

B　句法

(8) 「どれほどか」と程度をたずねる形で、ここは「(楽しめる時間は）どれほどあろうか、いや、いくらもない」という反語（詠嘆をこめた言い方）を表す。 ／「反語」と説明する教科書と「詠嘆」と説明する教科書がある。どちらでも「楽しめる時間は少ない」という意味をはずさないこと。お使いの教科書の説明に合わせる

(9) 抑揚（形）。「まして〜はなおさらだ」の意。 ／★先に軽い例（⑤昔の人でさえ夜まで遊んだ）を出し、「況んや」でより強い例をあげて「なおさら」と強める。文末は「〜をや」で結ぶ

(10) 再読文字。「いまだ〜ず」と読み、「まだ〜ない」の意。 ／★ここは「(静かに景色を味わう楽しみは）まだ終わらない」。一度目は「いまだ」、下から返って二度目に「ず」と読む

(11) 打消の仮定。「もし〜がなければ」の意。 ／白文は「不有佳作」。打消の「ず」に「は」がついた「ずは」が「ずんば」となったもの。⑮「詩成らずんば」も同じ形

(12) 反語。「どうして〜しようか、いや〜しない（できない）」。ここは「どうして風雅な思いを述べ表せようか、いや、できない」。 ／★文末が推量の「ん（む）」で結ばれているのが反語の目印。前の「佳作有らずんば（仮定）」とセットで「〜がなければ、どうして〜できようか」

(13) 「もし」と読み、「もし〜ならば」という仮定を表す。 ／★「如」「若」は「ごとし」とも読む。③「夢のごとし」は白文では「若夢」で、「〜のようだ」という比況。読み分けがよくねらわれる

C　主語・指す内容

(14) 「我」＝作者の李白／招いているのは陽春（あたたかな春）。 ／春を人のように「私を招く」と書いている（擬人法）。⑦の「大塊（天地）が私に貸す」も同じ書き方

(15) 群季の俊秀（弟たちのなかの、才能のすぐれた者たち）。 ／「群季の俊秀は、皆恵連たり」。「〜は」の部分が主語。「たり」は断定（〜である）

(16) 吾人＝作者の李白自身。 ／「吾人の詠歌は、独り康楽に慚づ」。⑨の弟たちと⑩の自分とが対になっている

(17) 作者の李白と、宴に集まった一族の弟たち（兄弟どうしの楽しい集まり）。 ／「天倫」は肉親どうしの間がらで、ここでは兄弟をいう。「序す」は「叙す」と同じで「述べる」こと

D　口語訳

(18) そもそも天地は、あらゆるものが（ひととき）身を寄せる宿屋のようなものであり、月日は永遠に通り過ぎていく旅人のようなものである。

(19) そして、はかない人生は夢のようなもので、楽しみを味わえる時間はどれほどあろうか（いや、いくらもない）。

(20) まして、あたたかな春がかすみにけむる景色で私を招き、天地が私に美しいあや（色とりどりの景色）を貸し与えてくれているのだから、なおさら（夜まで楽しまずにはいられない）。※「文章」を「詩文（を作る力）」と取る教科書では「天地が私に詩文の才を貸し与えてくれている」と訳す。

(21) すばらしい詩ができなければ、どうして風雅な思いを述べ表すことができようか（いや、できない）。

E　内容・記述

(22) 人生は夢のようにはかなく、楽しめる時間はわずかしかないから。(三十字) ／直前の③④が理由にあたる。この一文は、昔の詩（古詩十九首）の「昼は短くして夜の長きに苦しむ、何ぞ燭を秉りて遊ばざる」をふまえるとされる

(23) ⑤で「昔の人でさえ、人生の短さを思って夜までともしびを手に遊んだ（それはもっともだ)」と軽いほうの例を先に示し、⑥⑦で「まして、春が美しい景色で私を招き、天地が美しいあや（または詩文の才）を貸してくれている今は、なおさら夜まで楽しむべきだ」と、より強い結論を導いている（抑揚)。 ／「Aでさえ～だ。ましてBはなおさらだ」の形。省略されている「なおさら楽しむべきだ」まで書けると満点

(24) 謝恵連と謝霊運は、同じ一族の弟と兄で、ともに名高い詩人だった。その関係を自分たち（兄の李白と一族の弟たち）に重ね、弟たちを謝恵連にたとえてその詩の才能をほめ、自分は兄の謝霊運には及ばないとへりくだるため。 ／⑨「群季の俊秀は、皆恵連たり」と⑩「吾人の詠歌は、独り康楽に慚づ」は対句。ほめる（弟たち）と、へりくだる（自分）が対になっている

(25) 「月に酔ふ」／美しい宴席を設けて花の下に座り、雀の形の杯をさかんにやりとりして、月を眺めながら酔う、という花と月に囲まれた風雅な春の夜の宴の様子。 ／「瓊筵を開く」と「羽觴を飛ばす」、「花に坐す」と「月に酔ふ」が対応する。この文章は四字・六字の句を中心に、対句を重ねる駢文（四六駢儷文）で書かれている

F　文学史・故事

(26) 『おくのほそ道』／松尾芭蕉。 ／★書き出しは「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」。月日を旅人にたとえる発想も受けついでいる

(27) 字は太白／唐（盛唐）／「詩仙」。 ／同じ時代の杜甫は「詩聖」と呼ばれ、二人をあわせて「李杜」という

(28) 晋の石崇が別荘の金谷園で宴を開いたとき、詩を作れなかった者に罰として酒を飲ませた（その酒の量）という故事。罰の酒の量は、石崇の『金谷詩序』では三斗とされる。 ／『古文観止』の注のように「三觴（三杯)」と説明する本もあるが、石崇自身の『金谷詩序』は「罰酒三斗」。量を書くなら「三斗」。「依らん」の「ん」は意志（～しよう）

【現代語訳（全文)】

そもそも天地は、あらゆるものが（ひととき）身を寄せる宿屋のようなものであり、月日は永遠に通り過ぎていく旅人のようなものである。そして、はかない人生は夢のようなもので、楽しみを味わえる時間はどれほどあろうか（いや、いくらもない)。昔の人がともしびを手に持って夜まで遊んだのは、まことにもっともな理由があってのことだ。

まして、あたたかな春がかすみにけむる景色で私を招き、天地が私に美しいあや（色とりどりの景色）を貸し与えてくれているのだから、なおさら（夜まで楽しまずにはいられない)。桃や李（すもも）の花の香る庭園に集まって、兄弟どうしの楽しい集まりのことを（この文に）述べる。弟たちのなかのすぐれた者は、みな謝恵連のように詩が上手だ。（それにひきかえ）私の詠む詩歌だけは、謝康楽（謝霊運）に及ばず恥ずかしいばかりだ。

静かに景色を味わう楽しみはまだ終わらず、気高い語らいはますます清らかになっていく。美しい宴席を設けて花の下に座り、雀の形の杯をさかんにやりとりして、月を眺めながら酔う。すばらしい詩ができなければ、どうして風雅な思いを述べ表すことができようか（いや、できない)。もし詩ができなかったら、罰は金谷園の宴の故事にならって、決まった量の酒を飲ませることにしよう。

※「文章」を「詩文（を作る力)」と取る教科書では、「天地が私に詩文の才を貸し与えてくれている」と訳します。

▸ 漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/kanbun-sankousho/　　▸ 解説記事にもどる